



府中の波止場



七尾港は古くから海運業が盛んで、能登食祭市場周辺の府中浜は商品流通の拠点的な場所でした。そこで古くから廻船問屋を営んだり、船頭として雇われたりした人たちが、港や御祓川周辺に近い旧七尾町内に大勢住んでいました。

今回紹介するのは、明治の初期には船頭として北海道と七尾を往来し、その後自分で海運業を営んだ湊町の佐味徳太郎氏の資料です。

現当主の吉夫氏の話によれば、徳太郎氏は氷見市中波の大西家の生まれで、明治18年ごろは金毘羅丸という船に乗っていました。その後、佐味家の婿養子となった方だそうです。

徳太郎氏は佐味家に来てからは大國丸という船の船長として活躍して、北海道岩内港や小樽港、さらには伯耆国(鳥取県)境港で商品を売買した時の領収証などが残されています。当時の領収証や請求証は、「仕切書」と呼ばれ、独特の字体で商品名や値段、宛先などが記されています。その仕切書からは、その船



仕切書



の流通経路や交易関係を知ることができ、当時の海運業の貴重な資料となります。

明治30年以降、徳太郎氏は大國丸の船長を辞めて自分で海運業を営んだようです。資料では主に中島町地域との流通が多く見られます。

明治32年ごろの筒鯨販売代金書上では、河崎村栄蔵や塩津村横山五平、笠師村村田喜右衛門、同村太郎左衛門、同村清三郎、土川村太三郎などの名前が記載されています。この他には、炭や石灰、木皮(杉・アテなど)を中島の各地区で販売していたようです。明治39年には、4月8日付